

「美しいものを彫り続けたい」 福光町ゆかりの板画家

棟方 志功



心に感じたままを表現したい

「ああ、ふすまがだめになってしまった！」

見物していた人々は、思わず声を上げそうになりました。

福光町の光徳寺では、高坂貫昭住職の知り合いで東京から来た芸術家が、大きな筆で勢いよく絵を描いていました。

その芸術家こそ、後に、世界的に有名な板画家として活躍する棟方志功さんでした。

志功さんは、光徳寺の裏山につつじが咲きあふれる様子を見て、飛沫(しぶき)を飛ばす表現方法を思いつき、激しい勢いで、一気に大きな松の木を描き始めたのです。

見たもの感じたものを、まっすぐに表現したい。全身全霊をかたむけて、ただひたすら、心のままに描くんだ。

福光美術館には、志功さんの作品がたくさんあるよね。

志功さんは、版画のことを「版画」と表現し、独自の表現を追究しました。

棟方志功さんは、青森県で生まれましたが、福光町にもゆかりのある画家です。



温かな人情、豊かな自然……。
福光は、なんとよいところだろう。
ここ第二のふるさとで
思う存分、作品をつくらう。

2 文化の花を咲かせよう

棟方志功さんの三二年表

西暦	年齢	
1903年		青森県青森市の刃物鍛冶屋に生まれる
1921年	18歳	ゴッホの「ひまわり」を見て、画家になる決心をする
1924年	21歳	青森から上京する
1928年	25歳	板画の道に入る
1944年	41歳	光徳寺のふすま絵「華厳松」が完成する
1945年	42歳	福光町法林寺に疎開する
1948年	45歳	「瞞着川板画卷」を制作する
1956年	53歳	ヴェネツィア・ビエンナーレ展で国際版画大賞を受賞。「世界のムナカタ」の地位を確立する
1975年	72歳	亡くなる



福光美術館には、志功さんの作品75点が所蔵されています。

そんな志功さんの思いが、ぐいぐい筆を走らせました。

できあがったふすま絵「華厳松」を見て、人々はびつくりしました。あまりの乱暴な描き方に、最初は失敗かと思われたのに、完成した絵は、見る者を圧倒するような素晴らしい作品だったのです。

わだば（私は）ゴッホになる

「華厳松」を描いたように、志功さんは、墨絵でも板画でも、ありのままの心の動きを表現した画家でした。

その志功さんに大きな影響を与えたのは、ゴッホの絵でした。

「こ、これがゴッホの絵か！」

志功さんは、雑誌『白樺』に載ったゴッホの「ひまわり」を、食い入るように見つめました。

太陽に向かって、燃え上がる炎のように咲く、ひまわりの花。

18歳だった志功さんは、その絵を見た瞬間、頭をガンとなぐられたような気がしました。

ゴッホには、ひまわりの花のいのちが、きつと炎のように見えたに違いない。だから、炎がゆらめくような勢いのある線で、表現したんだ。

ああ、自分も、ゴッホのように、心のままに描いてみたい！

志功さんは、心の奥のこもこもとした願望が、はつきりとした形になって、浮かび上がったように感じました。

「わだば（私は）、日本のゴッホになる」

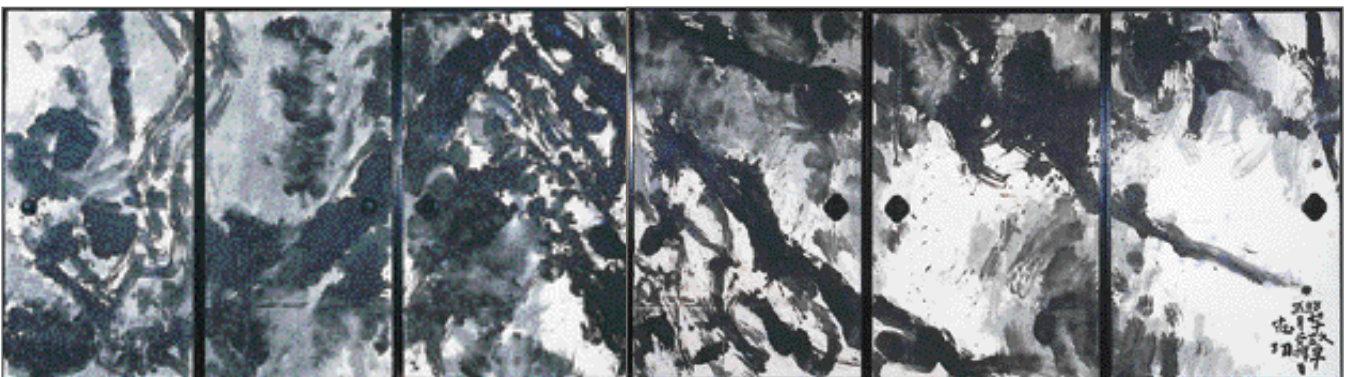
そう決心した志功さんは、画家をめざして上京しました。ところが、

大きな展覧会に作品を出品しても、なかなかその良さを認めてもらえませんでした。苦しい日々が、何年も続きました。

志功さんは、靴直しや納豆売りなどをしながら、絵を描き続けました。最初は、ゴッホのように油絵をやるつもりでしたが、だんだん心の中に疑問が生まれてきました。

油絵は、西洋人の表現方法だ。では、日本的な美の表現とは一体なんだろう…。

志功さんは、いろいろ考えた末に、やまと絵や書、版画など、古くから



光徳寺のふすま絵「華厳松」は、志功さんの最高傑作とも言われています。

子どもたちの感想

福光町立福光中部小学校6年生の
お友達の感想です。

志功さんを知り、作品に対する気持ちの強さと人柄のよさが強く心に残りしました。板画に対する気持ちは他の人よりも10倍は強いと思うし、板画を楽しんで制作しています。また、人には自分の努力しているところは見せず、周りの人についても明るく楽しく接し、思いやりのある人だなあと思いました。(山田 菜さん)

志功さんのことを調べてきて学んだことは、「夢はあきらめない」ということです。志功さんは左目を失明、右目は近眼で視力がほとんどありませんでした。けれど、板画の道に進み、世界の「ムナカタ」になりました。私も高い目標をもち、夢に向かって突き進むような人になりたいです。(嶋 香穂里さん)



志功さんから光徳寺の住職に送られた手紙。

日本に伝わる方法で表現するようになりました。

福光に住む決心

光徳寺を訪れて「華厳松」を描いた次の年、志功さんは、戦争で空襲の激しくなってきた東京を離れようと考えていました。

「どこか、よい疎開先はないだろうか。青森以外に行きたいのだが…」

そのころ、志功さんは、生まれ故郷である青森県には帰りたくなかったのです。

自分は、青森では、まだ一流の芸術家として認められていない。成功して名を上げるまでは、ふるさとは帰れない。

志功さんは、そう固く心に決めていました。そんな志功さんに、福光から誘いがありました。

「ぜひ、福光においでくださいはれ」

光徳寺の住職や、医者松井寿美子先生からの誘いでした。

志功さんが「どうしようか」と考えていると、なんと荷物をまとめるための道具を持った迎えの人がやって来たのです。

ああ、口先だけじゃなく、心から自分を迎えてくれるつもりなんだ。自分を芸術家と認めてくれる人たちが富山にいるんだ！

志功さんは、住職や松井先生の温かい気持ちを感じとり、うれしさで胸がいっぱいになりました。

「よし、福光に行こう。そして、そこで作家活動を続けよう」

こうして、志功さんは福光に行くことを決心し、

その後約6年間、福光町に住むことになったのです。

福光は第二のふるさと

「いたずら好きのカツパの伝説か。おもしろい話だ」
志功さんは、好奇心のあふれる様子で、地元の話に聞き入りました。

志功さんが身を寄せていた法林寺には、豆黒川という川が流れており、昔からいたずら好きのかつぱが住み、人をだますと伝えられていたのです。

志功さんは、その伝説がとても気に入りました。あまり気に入ったため、その伝説をもとに、絵と文章を組み合わせた39枚の板画作品を作りました。

作品の名前は、「瞞着川板画卷」。カツパが人をだますから、「瞞着川」と名づけたのです。

このほかに、志功さんは、福光にたくさん作品を残しました。

志功さんは、生まれつき視力が弱いものの、後にイタリアのウエ

ネツィア・ピエンナーレ展で国際版画大賞を受賞し、「世界のム

ナカタ」とほめ称えられるほどになりました。

それでも、志功

さんは、福光を「第二のふるさと」として、い



福光町にある棟方志功記念館「愛染苑」。



志功さんのエピソード : 志功さんは頭の中で思ったことや考えたことを、すぐに紙や板木の上に描いていきました。そのため、板木に直接下絵を描いたり、ときには下絵を描かずに彫ったりしたそうです。

女性^{てんによ}は天女

志功さんは、女性を天女とたたえ、女の人に対して、特別な想いをもっていました。事実、志功さんの女人像には、母を慕う気持ちや、妻への愛情などがあふれています。



「沢瀉妃の柵」1971年の作品
(福光美術館所蔵)

祖母 つるさん

志功さんは、「おばあさん子」でした。志功さんは、子どものころ、おばあさんから「障子の中に仏様がいらっしやる、仏に見守られて生活している」と聞かされていたそうです。

母 さださん

志功さんは、子どものころ、お父さんに激しく叱られた時、お母さんが志功さんをかばって大きな傷を受け、包帯をしていた姿が忘れられません。自分の身を投げ出しても、我が子を守る母親の愛情に深く感激したのです。

チャヤ夫人

チャヤ夫人は、「私でなければこの人を支えられない、夫には絵にプラスになること以外をさせてはいけない」と考え、生活が苦しいときには、自ら内職をするなどして志功さんを助けました。チャヤ夫人は志功さんに限りない愛情を注ぎ、心から尽くしたのです。



福光町立福光中部小学校5年生のお友達が、志功さんが愛した瞞着川を訪れました。

つまでも忘れませんでした。
福光の人々もまた、画家としてまっすぐに自分の表現を追い求める志功さんの人柄を愛し、その作品を愛しました。
この世の美しいものの表れとして、女性像をたくさん描いた志功さん。その志功さんの心には、福光の地や人々の心も、美しいものとして映っていたに違いありません。



福光駅前には、志功さんの板画をもとにしたモニュメントが設置されています。

志功さんは、目標としていたゴッホと同じくらい、すごい画家になったんだね。



志功さんの作品は、とても印象的です。富山県立近代美術館にも志功さんの作品が収蔵されています。



志功さんの作品は、海外でも高く評価されているんだよ。



志功さんの言葉

それが板画です
愛しても アイシキレナイ
悲しんでも カナシミキレナイ
喜んでも ヨロコビキレナイ
驚ろいても オドロキキレナイ

棟方志功さんは、絵画の世界で自分だけの表現を追い求めました。陶芸の世界でも、志功さんと同じように、独自の作品を生み出した先輩がいます。それが石黒宗磨さんです。